

## 人材の活用にかかる意識



南房総 CCRC 事業研究会  
廣谷 彰彦

フランスの大統領選挙が終わり、エマニュエル・マクロン（Emmanuel Jean-Michel Frédéric Macron）氏なる方が、最後まで戦ったマリーム・ルペン（Marine Le Pen）氏に大差で当選し、5月14日に、就任した。興味を覚えたので、少し見てみる。（皆様も、既に御存知と思うが。）

1977年12月21日生（39歳）：学歴はパリ政治学院、国立行政学院（エリート官僚養成校）等。職歴は、2004年財務省財政監査官、2006年ドレーヌ・ルペル氏の選挙支援、2008年バルト & Cie 入行、2010年同行副社長、2012年大統領府副事務局長、（フランク・ホルスト 大統領に仕える）、2014年同内閣経済・産業・デジタル大臣、2016年大臣辞職、自身の党「前進！（En Marche!）」立上げ、等。

一般の評価は、優秀であるものの、偏屈、話が高尚過ぎる、人を見下す、スピーチが長い、など。「金融界の寵児・プリンス・金融のモーツァルト」などとも、銀行で活躍していた際に、噂されていた。また、一旦決めたことは、遣り通すとか、御夫人を獲得した際の評価に合わせて、言われている模様。

さて、本文の趣旨は、この様な個人の話ではなく、大統領のように、一国の将来を左右するような重要な選択にも、人物で選定している国民の意識に関して、話題にしたい。その根底には、私の心の奥に、「幾らなんでも、39歳の方を大統領にするかね！」がある。経験不足ではないか、優秀であっても、途中でとんでもないことをやらカサないのか、などなど。一般論であるが、フランスとは階級社会であり、一般庶民の感情を聞くと、従前から「難しいことは優秀なやつ等に任せておけば良い。俺らは、その出来栄えを批判していれば良いのさ！」など、「上の階級の仕事は、下の階級のものはどうにも出来ない。」といった、意識がある。マクロン氏が卒業した仏国立行政学院（École nationale d'administration: : ENA）は、フランス随一のエリート官僚養成学校であり、仏大統領や首相、高級官僚、経済人、などのほか、多くの日本人も卒業している。情報によれば、ENAにおいては、指導者になるための立ち居振る舞い、話術、メッセージのまとめ方、発表の仕方など、一般の教育課程以外に、徹底してしごかれる模様。卒業後はそのまま、組織の幹部、例えば自治体であれば、副知事などの役職に就くとのこと。

私の気持ちの上では、若いことに一抹どころか、多いに不安を抱えるところである。ただ、39歳とは如何なるものかと言うと、例えば米国の場合では、歴代45代（トランプ氏）の中で、就任時の最若は42歳、ケネディ氏が43歳であり、歴代の間に40歳代が9人居る。今回の競争相手ルペン氏で、48歳。すなわち、世界には若くして活躍されている方々が沢山いる。

その様な視点で我が国を振り返ると、歴史のあちこちにキラ星のごとくに、大先輩の方々が若輩ながら、登用され、偉大の功績を挙げられている。例えば、古市公威（1845）、田辺朔郎（1861）など、脈々と輩出されている。

私がマクロン氏の例を奇異に感じたとすれば、その様な大先輩方のご努力と成果を忘れていただけないのであろう。